

木綿糸を知っていますか

【問題編】

登場人物表（名前 学部・学年）

ミステリ研究会

牧田 文情・二回

鹿戸 理工・一回

速川 法・二回

竹本 心理・一回

剣持 文・二回

松江 経・一回

管理室

多田野 スポ・三回

丸井 生命・二回

0、回想

過去は過去、水に流そう

チェスタトン 『ブラウン神父の童心』

これは去年の物語。

1、旅程

夕方、木更津は（中略）蒼鴉城を去っていった

麻耶雄高 『翼ある闇』

わがD大学のKキャンパスは、京都市は南部に位置するK市内にある。京都市内で歴史と伝統に囲まれながら学問を修めることのできるIキャンパスとは異なり、Kキャンパスでは駅を降り立つと、今なお田園風景が広がっているのを見ることが出来る。昼間はKキャンパスを行き来する学生たちで賑わっている道路も、雨の季節ともなると、夜にはカエルの鳴き声で大いに賑わうことになるのだ。

\*

時刻は九時。きみはいま、駅から出てこの町に降り立った。

接続の非常に悪い電車に腹を立てながらも、既に充分に暑くなっている六月

のK市にきみは対面したのだ。おめでとう。

とりあえず、というのも変な話だが、とりあえずはKキャンパスの正門に向かうことにしよう。大学からの最寄駅である、楮（こうぞ）駅からKキャンパスの正門へと向かうための道はいくつかあるが、ひとまずは一番メジャーな道、王道を使うことにしよう。道程だけで言えば最短であることであるし。

駅からの階段を下りまっすぐ南に向かう。五分ほど歩いただろうか、きみの右斜め前方に大きな陸橋が現れる。陸橋を渡り切り、まっすぐ行ってT字路にぶつかればそこが目的地の正門である。ならばすぐに正門へと向かうべきか。しかしきみは焦らない。ひとまず、冷房の効いた「ふもと」のコンビニでお茶を買い込んだ。

さて、ここで先程の「ふもと」という表現について補足しておきたい。端的に言えば、目的としている大学のこのキャンパスは山の斜面に建っているということなのだ。

ときは初夏。きみは汗をかきかき斜面を登る。

ただの斜面といっても傾斜角度から考えると消費するエネルギー的には山登りと大差がない。愛着と憎悪を込めて「T坂」と呼ばれている。毎年一定数の新入生はこの坂道に対し自転車挑戦するが、学期の途中で歩いたほうが早い、ということに気づき、結局は徒歩での通学に切り替えるのだという。

正門が見えた。

さて。言葉の勢いだけで正門まで来てしまったが、今現在九時三十分。まだまだ、きみが受講している授業の開始時刻には早かった。特に急ぎの用事もなく手持ち無沙汰だ。文化系サークルの部室が集うK別館、通称ボックス棟で今回は時間をつぶすことにしよう。きみは、所属するミステリ研究会の部室を覗いてみることにしようと思案する。

ボックス棟へと向かうためには正門沿いの大通りを下っていき、南門へと向かうルートと、学校の敷地内を通ってボックス棟へと入るルートの二種類のルートが存在する。今回きみは後者のルートを採るようだ。

きみは急で長い坂道を登ったことによって息を半ば切らせながらT坂を登りきり、正門前の大通りを青信号で渡り、正門をくぐる。

この気温、湿度では何もしくとも身体が汗ばんでくる。T坂を登ってきたきみには、なおさらのことだろう。君は今一度ズボンの左ポケットからハンケ

チを取り出し、額の汗を拭った。

正門をくぐり、正面やや左方向に見える建物がTキャンパスにおける大学図書館だ。小説類、こと文庫本に関してはIキャンパスよりはるかに品揃えが良いはずなのだが、今回この建物の存在は完全に無視される。

きみは図書館の南側にある校舎、一号館の一階をくぐりぬけ、階段を下りて、二号館の一階を通り過ぎて階段を下りてボックス棟の二階へと入る。

こうして文字にしてみると馬鹿げているようだが如何せん大学が山の斜面に建っているので実際的にはこの階数表示は結構合理的であったりするのだ。

ボックス棟の二階へと入り込めばミステリ研究会のボックスはもうすぐそこである。廊下をほんの五〇メートル進むだけなのだ。

きみはようやくやくにしてミステリ研究会のボックスの、扉の前まで辿りついた。二〇三号室。この中ではまた誰かが騒いでいるのかもしれない。

コン、コン、コン。きみはドアを慎重にノックする。中から、「はい？」

と声が聞こえるのでしばらく待つてみるが、ドアは開かない。きみはドアノブに右手を伸ばし、回した。向こうからも回されているのか、手応えを感じ、ノブは回らなかった。

手を離すと、ノブはからりと回り、ドアは向こう側に開く。

きみはにんまりとした笑顔と手招きする左手とに向かい入れられた。ドアは更に大きく開いた。

## 2、駆引

オール・インです  
ヴァン・ダイン 『カナリア殺人事件』

牧田はポーカーのゲームに参加するための参加費、つまりはアンティとして一円玉をカップの中に放り込んだ。一円玉は鹿戸がポーカーチップとして先週持ってきたものである。それも六〇〇枚ほど。

「本当に、よくこんなに集めたものだね」  
剣持が隣に座っている鹿戸に声を掛ける。

「ええ。やっぱりポーカーはチップがないと詰まらないものですから。万が一

のことを考えて実家から持ってきた甲斐がありました。高校生の頃に家族でトランプをする時のために貯めたんですよね。一枚足りないよ」

鹿戸は向かいの竹本にアンティを出すように左手の人差し指と中指で示し、そうしてこつそりと呟く。

「実は使う機会なんてないと思ってたんですよね。ほかにサークルは入っていませんし、学科でもひとりぼっちですから」

しかしそんな鹿戸もここにはある理由から救済される。

「俺も俺も」「僕も僕も」「私も私も」全員がコントのノリで手を挙げる。

ノリで手を上げるが誰ひとりとして目が笑っていないからだ。きつと全員ほかのところではボッチなのだろう。優しいのか優しくないので判らない。

「まあ、とにかく。続きをやろうか」

今回の親番の牧田はカードを速川から時計回りに配る。一応アイスがかかっているのだ。この部屋には冷蔵庫などないので負けたら当然炎天下を、アイスを買に行かなければならない。現在チップが八〇枚と周りより負けている牧田としては安閑とはしてられない。二九、三〇と口で数え、自分のカードの枚数を確認した。

「よし、いいか。ベット二枚」

五枚あることを確認した牧田はカップの中にチップを二枚追加した。

この時点で牧田はエースのワンペアである。

「コール」「コールします」「コールです」「コール」「コール」

全員がコールして、カップの中にコインが合計十二枚追加された。

「来年文系学部がほとんど京都市内に行ってしまうわけですがどうなるんでしょうね。一枚ください」

「少なくとも食堂はしかり、ボックスもしかして、人口密度は減るだろうな」

「寂しくなるのかもしれないね。二枚頂戴」

「全員カード引いたな。オーケー。キャンパスの移転があるからってなんでそんなにI、Kキャンパスの違いにオーダーリア・グレイ。レイズ一枚」

「うん？ どういうこと？ 一枚はフォールト。降りた」

と剣持は自分の番の前に降りた。これはジャックのワンペアであった。

「どうせくだらないギャグだろう。でも降りる」  
速川は裏向きのままカードを投げ出した。四枚がダイヤの、ワンペアだった。

「要するに、違いに拘泥……コーデリア、ゴホンゴホン」

なぜか急に牧田は右手を口元に当てて咳き込んだ。

「うっわ。寒む。審議中」。コール一枚「竹本はレイズに応じる。」

「来年は一回生集まるんでしょうか。降ります」

ギャグをスルーした松江はそつとスリーカードを左手の下に伏せた。

「このサークルはどんな事件があつても、何かやらかしても新入会委員の数、それでもつて文系と理系の比はまるで呪いのようにほとんど変化してきてないからね、減りはしないが増えもしない。なかなか困ったものだよ」

早川は腕組みをしながら傍観している。牧田や竹本の手札を見てフンフンと頷いているようだ。鹿戸は、「レイズ十枚」となかなかの強気である。

牧田は鹿戸の態度を見てしばらく考え込んでいたが、速川に、

「ま、例えKキャンパスに残ったとしても、この山の近くにすまなきやいいんだよ。通学は電車にしないさい、電車に。間違つてもこの辺に住んじやあいいかいよ」とからかわれると、

「それつてこの中じや俺ひとりしか該当者がいないじゃないか」

半ば自棄になったかのように自信満々でレイズ二〇枚を宣告した。

「そうですね、でも二〇枚はコール」「はい。レイズ三〇枚」レイズされた。

牧田は微妙に渋い顔で、「オール・イン」と宣告。チップをすべて投げ入れる。

「コール」「コール」コールされた。

しかし。「スピードのフラッシュです」「残念、フルハウスだ」

牧田は鼻を鳴らす。

「エースのフォーカードだ」

勝つたのは牧田だった。

速川は手を叩いて笑っていた。

### 3、記事

もつと早く出すべきだったが、気持ちが悪く落ち着かぬことから、

手が震えて、思うようにペンが動かなかった

カー『パリから来た紳士』

麻酔薬等紛失か 問われる責任の所在

先月最高裁において判決が下された医療事故で重大な過失があったと認められ捜査の手が入ったK市立病院において、麻酔薬であるイソフルラン 500ml など三点が行方知らずになつていたことが明らかになった。4月に確認した時には存在が確認されていたとみられるが盗難の疑いもあり、薬剤に対する管理の徹底がなされていないかとみて警察は責任の所在を追求していく模様。

### 4、暗躍

人間はだれだって、ポテンシャル・マードラーだ。

同時に、みんな死にたがつてる

都筑道夫『最長不倒距離』

……コン、コン。

「はい？」

こんな朝早くに誰だろう？ 速川は内心首を傾げる。まだまだ朝早い。

とはいえ人のことは言えないか。ボックス棟には泊まることは問題が多発したため今年から禁じられている。開館時間は八時である。ところが、速川は開館一番乗りでボックス棟に来てミス研のボックスを開けることがこのところ常習化していた。寝つ転がっていたおんぼろのソファから立ち上がり、鍵を開けた。

「なんだ、お前さんか。おはようさん」

朝の挨拶をすると速川は扉の前から踵を返し、ソファの傍らに葉を挟んで置いておいた『朱の絶筆』を再び取り上げようと屈んだ。背後から顔先に向かつて伸びてくる魔の手の存在に、彼はまだ気づいていなかった。

暗転。

### 5、断章

だが、大体において江南は、

その手の細々とした機械トリックが嫌いだつた

綾辻行人『黒猫館の殺人』

その部屋には五人の男女が集まっていた。部屋の中で男は言った。

このようにすればこの密室は解けるものなのだ、と。

では実際にやってみるがいい、ともう一人の男は応える。

最初の男が「その物体」を取り上げ、所定の位置にセットした。

男は部屋の外へと出てノブを回す。

鍵は掛からなかった。

もう一度。

所定の位置にセット。部屋の外に出る。ドアを閉める。鍵は掛からない。

今一度、もう一度と、何度も位置や角度などを微妙に変えつつやってみる。

が、それでも成功しない。

しかし、いまや鍵をかける方法はこれしか考えられないのだ。

確かにこの、「方法」自体は正しいのだ。

重さが足りないのかな、と女は周りにかすかに聞こえる程度の音声を発する。

そう、「重さ」が確かに足りないのだ。

ガチャリ。

その不毛な実験は十七回目にしてようやく成功した。

しかし。

十八回目、十九回目……は、やはり失敗に終わった。

タイムリミットまでの時間は最早、幾許も残されてはいなかった。

## 6、発見

ずっと金を握らずにいれば、手の肌も荒れませんか

島田莊司『斜め屋敷の犯罪』

正午。竹本はこの日の授業が早く終わり、いつもより早くミス研ボックスの前に立っていた。竹本は音高くドアをノックし、そのノブを回した。

暑さのためかじっとりとしむ汗にノブを握る竹本の手が少し滑った。

ドアは開かなかった。鍵がかかっている。ドアの上の小窓を見上げると、明

かりは点いているのが確認できた。その小窓も閉まっている。

竹本はさてどうしたものかというように首を捻った。首の関節が鳴る。

息を一つ洩らすと、竹本は階下にある鍵の貸出受付をしている管理人室に向かった。ミステリ研究会会員特有の勘というものでも働いたのだろうか、彼の脳裏には得体のしれない不安ともいえるべきものが渦巻いているようだった。

竹本はたんたん階段を一弾飛ばしで降りていく。

\*

あまりの熱気のため管理人室だけでも冷房の設定温度を下げようかななどと少々身勝手なことを考えていた多田野は、管理人室に掛かっているアナログ時計を見た。時計の針は正午をほんの少し回っているようだった。その時、階段を一段飛ばしで降りてくるような音が聞こえた。竹本である。

「すみません」ガラス窓越しに声をかけられる。

「はい、なんででしょうか」

「二〇三号室の鍵は誰が借りている事になってるのでしようか」

「えっと……」多田野は団員証が差し込んだのである棚を調べた。

「こちらの方ですね」

そう言って多田野が竹本に差し出したのは速川のカードであった。

それを見て竹本は速川の携帯の番号に電話をかける。電話には誰も出なかった。「寝てるのかな？」と竹本は呟いた。

その時である。ボックス棟の一階、管理室のすぐ隣にあるドアが鈍い音を立てて開き、剣持が顔を出した。

「ああ、剣持さん。こんにちは」

「こんにちは。竹本君、ボックスって開いてる？」

剣持は左手を振って挨拶を返した。

「それが、速川さんが中でまた寝てるのか、それで電話にも出なくて」

竹本の言葉に剣持は軽く顔を振った。

「マスターキーで開けてもらったら？ 私も速川さんに取っておいてもらったら

レジュメが午後から要るからできれば開けてもらいたいし」

そうして管理人室の方へ顔を向ける。

「すみませんが、マスターキーで部屋を開けて頂くことはできますか？ もし

かすると熱中症か何かで倒れているかもしれないし。お願いしたいのですが」

「ええ、よろしいですよ。しばらくお待ちください」

そうして後ろで他の業務をしていたバイトの大学生の一人に椅子を回して、

声をかける。

「丸井さん、もし良かったら鍵開けてきてくれる？」

「あ、いいですよ」

その丸井というらしい、眼鏡をかけた学生は多田野から鍵の束を受け取り、管理人室から出てきた。

二階にて。

「今開けますねー」

丸井はそう言っただけじゃあつかせながらも鍵束の中から目的の鍵を選び出し、鍵穴に差し込んでガチャリと回した。そうして竹本と剣持に声をかけた。

「どうぞ、開きましたよ」

剣持はその声に押されるかのように前に出てノブを回した。

ドアが開く。部屋の中の湿気と熱気が三人の肌を叩いた。

ドアの向こうは血の海であった。

剣持は後ずさりして丸井の顔面に衝突した。

動転しているようであったが、三人はこの部屋には鍵が掛かっていたこと、

入口付近に転がっている血糊のついたお茶のペットボトルや、テーブルの中央

に二つ折りにされたスピードのカード、などの妙な物体が散らばっていること、

そしてなにより、横たわる速川の身体が明らかに生命活動を停止させているこ

とには気づいていたのであった。

\*

剣持と竹本は眼下に広がる血の海を冷めたようにも見えない目で見つめ、その中に転がる速川に一瞥をくれる。早川の右胸にはナイフが深々と突き刺さっている。どう見ても死んでいた。部屋の中に生者はいなかった。

「これは、」と竹本は震える声で言った。

「密室、殺人」二人の声は偶然にも重なる。

確かにこの時、この部屋の右手奥、ロッカーの向こうにはマスターキーを除けばこの世には一本しか存在していない鍵がフックにかかって静かに鎮座ましましていたのである。

「け、けいさつ」二人の後ろで丸井はうめいた。

ようやく落とした眼鏡をかけ直してポケットから携帯を取り出そうとした丸

井の右腕を振り返りざまに竹本と剣持は素早く押さえつけた。

「ちよつと待つてください」「お願いします」

丸井はそれを振り払おうとする。

「ちよ、ちよつとじゃありませんよ。あなたたち何をしているんですか。人が死んでるじゃないですかどう見たってこれ、死んでるじゃないですか」

丸井が喚いた。ミス研には運転免許も取れないような非力な運動音痴しかない。

二人掛りでも振り払われそうになる。

「そこの方。まあ先輩たちの話、話だけでも聞いてみたらいかがですか」と提言したのは鹿戸だった。

気がつくとはかにも二人が、丸井の悲鳴ともつかない声に呼び寄せられたのか、それとも単に昼飯を食べに来たのか判らないが集まってきたおり、奇しくもそこには前日ポーカーをした面々が死んだ速川も含めて全員集まっていた。

「密室ですか。よくやりますな」そう言ったのは牧田である。

「それで、どうしましょうか」そう尋ねたのは松江だった。

「だから警察呼ばなくちゃって……」

丸井のその声は途中で遮られた。

「それは一時間だけでも待つてはもらえませんか」牧田は手袋を装着した。

「その間にこの事件、どうにか解決させますから」剣持は手袋を装着した。

「そうすれば私たちもおとなしく退散しますから」松江は手袋を装着した。

「そうです、あと一時間です。授業が始まるまで」鹿戸は手袋を装着した。

「その通り。解決するので。ぜひとも、よしなに」竹本は手袋を装着した。

一斉に畳み掛けられた丸井は、

「こ、こいつら……く、狂ってやがる……」

と、断末魔の叫び声をあげ、その場へと昏倒してしまっただった。

ガチャリ。

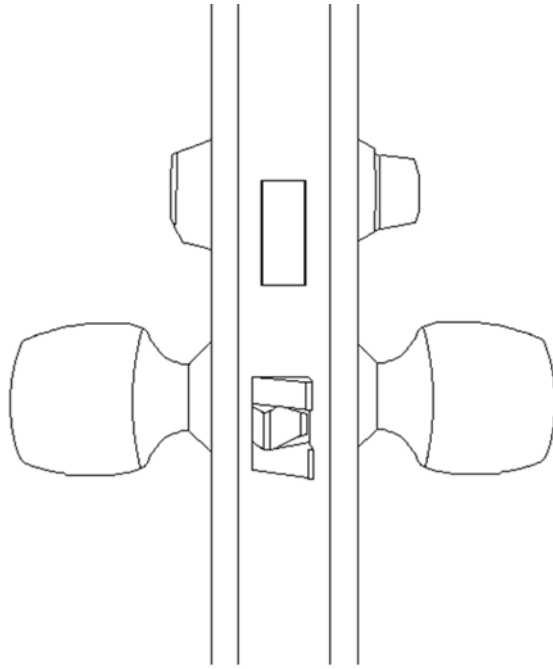
かくして再び錠は回され、ボックスの扉は閉ざされた。

## 7、検分

「総代―これは！」(中略)「密室卿からの挑戦状か、あるいは―(中略)密室の『鍵』だ」

主にミス研調べ。現場の状況、死体の状態は以下の通り。  
(写真・現場再現図も参照のこと)

・ドア



右は扉の断面図。右側が室内である。発見当時この扉には鍵がかかっていたものと考えられる。鍵は部屋をはいって右、本棚として使用されているロッカーのさらに奥にあるフックにかけられており、糸などを縛り付けた形跡は鍵にもフックにも、そして周辺の器具にも認められなかった。ドアの下部にはガムテープが目貼りされており、血液の室外への流出を抑え、発見を遅らせたものであると考えられている。また、視認出来る範囲ではドア、そしてドアの上の小窓には積もった埃が乱れた形跡は見当たらなかった。窓は鍵がしまっていた上に最近触れられた形跡はなかった。天井や壁も堅牢なものである。

・家電

室内に設置されていた家電製品はアナログテレビ、パソコン、扇風機、電気ポット、そして各種のゲーム機であり、テレビと電気ポットのプラグがコンセントに差し込まれていた。  
なお、死体発見時、ブレーカーはONに入っていたことが複数人の証言から明らかになっている。エアコンの電源は入っていなかった。

・その他小物など

主に事件前日との差異について述べる。  
二つ折にされたトランプのカードはテーブルのほぼ中央に置かれていた。事件前日の段階では見当たらなかったとのこと。  
ソファアの脇には毛布が一枚たたまれている。その上には鮎川哲也の『朱の絶筆』が置かれている。被害者が読んでいたものと思われる。講談社文庫である。

ポーカーチップとして使われていた一円玉は二八〇枚ほどがケースの中に残されていた。残りはペットボトルの中に入っていた。

ドアの左、黒板の下あたりには血糊で濡れた、一円玉と水の入ったペットボトルが転がっていた。銘柄は被害者も愛飲していた、A鷹である。一階に設置されている自動販売機などで誰でも購入可能。重さは封を切る前のA鷹とほぼ同じであった。水は廊下の水道か何かを利用したものと思われる。

本棚として使用されているロッカーの上にはポリエステルの瓶が置かれていた。インフルラン 500ml である。後に購入直後のものがK病院から盗まれていることが明らかになった。

カッターナイフには丸めたガムテープが貼り付けられている。ペットボトルの横で発見。

・死体

ドアとテーブルのあいだにドアから見て右を向いて転がっていた。  
死後硬直などの具合から見て、部屋の温度も考慮すると発見時において死後

三、四時間程度であると推測される。致命傷は発見されたナイフによる右胸への刺し傷であり、ほぼ垂直に刺されていた。その他の外傷については、首にカッターナイフによるものとみられる切り傷があり、頸動脈まで達していた。現場が血の海になったのはこの傷が原因だと思われる。

・その他の情報

正門、南門、その他の大学入口には監視カメラが設置されており、今回の容疑者は皆、事件の起こった日においては一回学校に入ったきり出ていないことが判明している。

マスターキーは複数人によって管理されることになっていたようである。大学その他近辺には事件に関わるような証拠品は見つからなかった。

## 8、聴取

ちよつと座がしらけたが、  
私たちは、またあたらしくゲームをはじめた

クリステイ 『アクロイド殺害事件』

「ええっと」

部屋に入り最初に声を発したのは松江であった。

「とりあえず、今回の場合、一番怪しいのはこのサークルの人たちだと思いたすので、とりあえずアリバイをですね、確認したいな、と」

「じゃあこの中で、おそらく犯行は今日の午前中でしょう。今日の午前中にアリバイのある人、自信を持ってアリバイがあると主張出来る人は挙手しましょうか」

牧田が提案したが、誰も手を挙げる者はいない。ボッチは辛い。

「大学の授業って出席の確認は緩いし、もし出席を取ってても結構教室の出入りに対して管理が甘いからアリバイは厳しいと思うの」  
剣持はコロコロと笑いながら指摘する。

「現場（げんじょう）不在証明、持つものなし、か」

鹿戸が「げんじょう」の部分に若干の力を込めて言った。  
気まずい空気だけが流れる。

ただ時間が過ぎていく。とりあえず部屋の中のあれやこれやを調べることにした。持ち物検査もしたが特に事件と関係するかもしれないものを持っている人間はいなかった。

そんな状況に変化が訪れたのは四十五分が過ぎようとするときだった。

「密室だけなら、なんとかなるかもしれない」  
そんなことを言い出すものが現れたのだ。

## 9、読者への挑戦

ここで古くよりの慣習に従い、という古くから伝わる切口上を用いて作者は今読者に向かって挑戦する、つまり手袋を投げるものであります。決闘の内容はお察しの通りのフーダニット、「誰がやったか？」です。単独犯で、犯人以外は事件の解決に関わることはないという嘘についてはおりません。

容疑者は一応、物語のここまでの段階で名前が挙がった人物だけです。ミステリ研究会と管理人室に所属する人間に重複はなく、さらに、苗字が同じ人物は登場していないと宣言します。

D大学ミステリ研究会Kキャンパスでこの日発見された、「速川」を刺殺したのは誰であるのか、その一点が問題です。問題であるはずなのですが、今回の問題は「某本格推理小説」と同じく、密室の謎を解かないと犯人を指し示すための論理の糸にたどり着くことが困難になっています。

そのため、極めて不親切なヒントを差し上げますと「人參をぶら下げる話」あたりでしょうか。

犯人は誰か、その一点だけが問題であると先程は申し上げましたが、実際のところ犯人だけ当てられても作者は痛くも痒くも御座いません。あくまでも、私は読者が論理的に犯人に到達されることを「期待」している次第であります。

さて、長々と口上を続けても仕方がありませんので、『エジプト十字架の謎』より、かのエラーリー・クイーンの言葉を引いてこの幕間を切り上げることに致しましょう。

つまり、「論理は、運の助けを必要としないものであるが——立派な推理と、幸運とを祈る」

【問題編 終わり】